

博士論文（要約）

一なるキリスト・一なる教会：12世紀ビザンツ＝アルメニア
教会合同交渉とネルセス・シュノルハリのキリスト論

濱田 華練

序論

研究の対象

本論文は、12世紀アルメニア教会の総主教・カトリコスにして神学者であるネルセス・シュノルハリ（Աերսէս Շնորհալի, Nersēs Šnorhali、在位 1166-1173）という人物の思想、とりわけキリスト論を研究の対象とする。アルメニア語で「恵み（šnorh）に満ちた（li）」を意味する「シュノルハリ」の称号を持つネルセス・シュノルハリは、その名にふさわしく教会の指導者としてだけでなく、神学をはじめとする諸学問に加え、詩作・作曲など多方面にわたって才能を発揮し、アルメニア文学史上最も多作な著述家の一人として知られる。また彼は、ビザンツ皇帝マヌエル 1 世コムネノス（在位 1143-1180）の時代にビザンツ・アルメニア教会間で交わされた教会合同をめぐる議論の当事者でもあった。マヌエル 1 世の治世下、イスラーム諸勢力や十字軍諸侯から東方の領土を奪回しつつあったビザンツ帝国は、帝国東方のフロンティアに居住するアルメニア人・シリア人との同盟を強化する目的で、カルケドン公会議をめぐる教義上の不一致によって分かれたアルメニア・シリアの両教会に対して合同を働きかけた。この教会合同をめぐる議論において、アルメニア側の代表としてビザンツとの交渉および神学討論の場に立ったのがネルセス・シュノルハリである。

教会合同に向けた交渉の過程と内容は、ネルセス・シュノルハリの弟子ネルセス・ランブロナツィの手で編纂されたアルメニア語の書簡集¹と、1169年と1172年の二度にわたってネルセス・シュノルハリの許に派遣され直接討論を行ったビザンツの使者テオリアノスによって書き残された議事録²からうかがい知ることができる。これらの一連の書簡およびテオリアノスとの討論において最も重要な論点となったのは、キリストの神人性に関する教理的表現の不一致であった。451年に開催されたカルケドン公会議と、その前後に生じたキリストの神性と人性の合一をめぐる神学論争によって、シリア・エジプトそしてアルメニアの東方諸教会が「分離」したことは周知の通りである。ビザンツ帝国にとっての教会合同とは、カルケドン以来正統信仰から「逸脱」したアルメニア教会が、教義や典礼における自らの「誤り」を修正し、ビザンツ側にとっての「正統」を受け入れることに他ならなかった。この文脈でのビザンツ的「正統」教義とはすなわち、「一つのヒュポスタシス（ペルソナ）における二つの本性」を奉じるカルケドン信

¹ 教会合同関連の書簡群は、『聖ネルセス・シュノルハリ書簡集』の中に収録されている。ネルセス・シュノルハリの全書簡を集めた『聖ネルセス・シュノルハリ書簡集』は1799年にサンクトペテルブルクで初めて出版された。その後、1860年にイスタンブル、1865年にエチミアジン、1871年にエルサレムで出版されている。本稿はエルサレム版（1871年）を参照している。

Հնդհանրական Թուրք Մրրոյն Աերսիսի Շնորհալի (Յերուսաղէմ, 1871). (以下 T'ukt'k')

² Θεωριανοῦ ὀρθόδοξοῦ διάλεξις πρὸς τὸν καθολικὸν τῶν Ἀρμενίων'. Jacques Paul Migne (ed.), *Patrologiae Cursus Completus Series Graeca*, vol. 133 (Paris: Imprimerie Catholique, 1864), 119-297.

条に他ならない。それに対して、アルメニア側は、カルケドン公会議の否認を正式に表明した 6 世紀以来、「神性と人性が合一した一なる本性」という教理的表現を正統教義として受容しており、教会合同の実現を目指す過程では、この異なる二つの神学的伝統の間に存在する教義上の差異が議論された。

また、ビザンツ・アルメニア間の教会合同問題は、5 世紀以来のキリスト論論争の延長線上にあると同時に、当時の東地中海世界の複雑な政治情勢にも左右された。ネルセス・シュノルハリが生きた 12 世紀は、バグラトゥニ朝アルメニア王国の崩壊(884-1045 年)とそれに続くセルジューク朝の侵攻を受けて故地を離れたアルメニア人貴族たちが、ビザンツ帝国の東方フロンティアであるユーフラテス沿岸北部やアナトリア半島東南部のキリキア地方に新たな封土を与えられて定住しはじめた時代である。こうしたアルメニア人の有力家系は、ビザンツ帝国だけでなく十字軍諸侯や時にはルーム・セルジューク朝、ザンギー朝といったイスラームの諸勢力とも結びつきながら、1198/9 年に正式に王国として承認され、その後 14 世紀まで存続するキリキア・アルメニア王国の基礎を形成していった。それに伴い、アルメニア人の政治的・文化的拠点もまたコーカサスおよびヴァン湖周辺地域から東地中海沿岸のキリキア地方へと移動していく。ビザンツ帝国・十字軍諸公国・イスラーム諸王朝が割拠する中で、故地を追われたアルメニア教会の地盤はきわめて不安定であった。そのような状況下で教会合同をめぐる議論に参加することになったネルセス・シュノルハリは、アルメニア教会の神学的伝統だけでなく、教会そのものの存続や、アルメニア人社会全体の利益なども考慮に入れた上で行動しなければならなかった。

研究史と本研究の位置づけ

この教会合同をめぐる議論における「神学論争」としての側面と、外交・政治上の問題としての側面のいずれに焦点を当てるかという点で、ネルセス・シュノルハリに関連する先行研究には二つの流れが存在する。一つは、アルメニアの歴史研究者 A. Bozoyan の研究を始めとする、教会合同をビザンツ帝国の東方フロンティアにおける軍事政策および宗教政策の一環ととらえ、ネルセス・シュノルハリの書簡を史料として分析の対象にした研究である。もう一つは、ネルセス・シュノルハリの書簡をアルメニア教会における「正典(カノン)」として位置づけた上で分析の対象とした研究である。後者の研究におけるネルセス・シュノルハリに対する評価は、研究者自身が何をキリスト教の「正統」とするかという点に大きく左右されてきた。その原因は、主にネルセス・シュノルハリのとった独自の神学的立場にある。

ネルセス・シュノルハリは、アルメニア教会が奉じる「受肉したロゴスの一なる本性」という表現と、それと対立するカルケドン信条の「一なるヒュポスタシス(ペルソナ)における二つの本性」という表現について、一方が真で他方が偽という二者択一ではなく、ロゴスの受肉という本来語りえざる真実を言語化する上で相補的な関係にあり、共

に教義として有効であると主張した。アルメニア教会は、5世紀末から6世紀初頭にかけてドウィンで招集された一連の教会会議でカルケドン公会議の否認を宣言して以来、キリストの「一なるヒュポスタシス（ペルソナ）における二つの本性」というカルケドンの教理を退け、「合一した一なる本性」という教理的表現を採用しながらも、カルケドン公会議の承認を求めるビザンツ帝国の圧力や、カルケドン派を支持するアルメニア人の存在によって、絶えずカルケドン派と反カルケドン派のあいだで揺れ動いていた。7世紀以降イスラームの征服によってギリシア・ローマ的キリスト教世界と政治的に分断されたアルメニア教会は、ビザンツ的伝統であるカルケドン主義を排除し、「受肉したロゴスの一なる本性」という表現に立脚するキリスト論を正統教義として確立した。しかし、9世紀から10世紀にかけてビザンツ帝国が再びその領域を拡張させていく中で展開されたビザンツの軍事・外交政策でアルメニア人が重要な位置を占めるようになると、再びカルケドン派・非カルケドン派が衝突する事態が生じた。そして、その都度アルメニア人神学者たちは自身の「正統教義」に則り、「二つの本性」という教理に対する反駁を展開していった³。ネルセス・シュノルハリもまたカルケドン派との論争を展開したアルメニア人護教家の伝統の中に位置づけられるが、彼のキリスト論的教理に関する叙述は、カルケドンの「二つの本性」という表現を必ずしも否定していないどころか、むしろその有効性を認めてさえいたという点で、他のアルメニア人護教家たちとは大きく異なっている。

このようなネルセス・シュノルハリの姿勢に関して、従来の研究においては大別して三つの見解が存在する。第一に、アルメニア教会の存続のため政治的配慮ゆえに、あるいは神学的観点からカルケドン主義の正統性を認めたがゆえに、ネルセス・シュノルハリは非カルケドン派からカルケドン派に転向したとする見解である。第二の見解は、ネルセス・シュノルハリは終始アルメニア教会の伝統的な「受肉したロゴスの一なる本性」というキリスト論を堅持していたというものである。その中でも、アルメニア教会の神学者による研究では、ネルセス・シュノルハリはアルメニア的伝統の守護者とみなされるが、他方カルケドン主義を正統とする立場の研究では、カルケドン派との和解を望みながらアルメニア教会の教義を放棄しようとするネルセス・シュノルハリの態度が日和見主義として批判されるなど、評価が分かれている。そして、上述のいずれとも異なる第三の見解は、ネルセス・シュノルハリが推進した教会合同事業を、現代でいうところの「エキュメニズム」の先駆けとみなすものである。20世紀半ばに活発化したエキュメニズム運動にアルメニア教会の代表として積極的に参加するとともに、アルメニア古典の研究者としても知られるカトリコス・カレキン（ガレギン）1世（K. Sarkissian）

³ 9世紀にコンスタンティノーブル総主教フォティオスへの反駁を展開したサハク・ムルトや、時代は下るがカトリック宣教に対抗した14-15世紀の神学者タテウのグリゴルなど、アルメニア教会の主要な神学者の多くは、反カルケドンの立場から自らの神学思想を展開している。

は、自身が著したアルメニア文学史の入門書においてネルセス・シュノルハリをアルメニア教会史および文学における「すぐれてエキュメニカルな人物 the ecumenical figure par excellence」と評価している⁴。また、アルメニア・カトリックの聖職者にして著名なアルメニア学者である L. Zekiyán と、現在のキリキアのカトリコスである Aram 1 世 (A. K'ēšišēan) も、ネルセス・シュノルハリを中世におけるエキュメニズムの先駆者として位置づけている⁵。

このように、ネルセス・シュノルハリが二つの対立する教理的表現の双方の有効性を認めているがゆえに、彼のキリスト論が「カルケドン (ビザンツ)」的伝統に依拠しているか、あるいは「非カルケドン (アルメニア) 的伝統に依拠しているか、という問題は、研究者自身がいずれの立場を「正統」とするかという点に左右されてきた。一方、「正統・異端」の二分法を乗り越え、「多様性の中の一致」をスローガンとする現代的なエキュメニズムは、神学論争から生じた宗派間の対立の原因を、信仰そのものではなく、政治的対立や言語の違いといった外的要因に帰し、教理的表現の差異を「多様性」の一つとして認める立場をとっている。これは、ネルセス・シュノルハリの立場と一見一致しているようにも思える。しかし、ネルセス・シュノルハリは、アルメニア教会という長い歴史をもつキリスト教会の長として、当然ながら自身の「正統」概念を持ち合わせていた。しかし、それが現代のカトリック教会、正教会、アルメニア教会がそれぞれ有しているものと同じであるのか、あるいはもし異なるのであればどのように異なるのかという点は、これまでの研究においては明らかにされてこなかった。同様に、エキュメニズムに立脚する研究も、ネルセス・シュノルハリが描いた教会間の宥和のビジョンと現代における「エキュメニズム」との差異には注意を払ってこなかった。それゆえ、彼自身がどのような「正統」意識に立脚していたか、そしてその「正統」の文脈の中でどのような論理展開によって「一なる本性」と「二つの本性」の双方が教理的表現として正しいという結論に至ったかということについては、未だ明らかにされていない。また、ネルセス・シュノルハリが、教会合同に携わる前から一貫して「優れてエキュメニカルな人物」であったかどうかという点についても、検討の余地がある。

こうした点を踏まえて、以下のようなアプローチからの研究を試みる。1) ネルセス・シュノルハリが、教会合同の議論に携わる前と後で、どのような思想的变化を経たかについて明らかにするため、彼の生涯と作品を年代順に追う。2) 教会合同問題が提起さ

⁴ Karekin Sarkissian, *A Brief Introduction to Armenian Christian Literature* (London: Faith Press, 1960), 47.

⁵ Պողոսու Լևոն Զէքիեան, Համափոփեանկան տրամախօսութիւն ՄԸ ՏԲ. դարուն. Հայգիտական մատենաշար «Բազմավէպ» 13 (1978); Boghos Levon Zekiyán, St Nerses Snorhali en dialogue avec les Grecs, *Armenian Studies/ Études Armeniennes In memoriam Haïg Berbérian* (Lisboa : Calouste Gulbenkian Foundation, 1986), 861-883; Idem., Quelques traits de la spiritualité de l'Église arménienne dans l'horizon de la démarche oecuménique de l'époque, Isabelle Augé & Gérard Dédéyan, *L'Église arménienne entre Grecs et Latins : Fin XIe - milieu XVe siècle* (Paris: Geuthner, 2009), 13-34; Aram I, Catholicos of Cilicia. *Saint Nersēs the Gracious and Church Unity. Armeno-Greek Church Relations (1165-1173)*. Antelias. 2010.

れた際にネルセス・シュノルハリが置かれた立場を明らかにしつつ、それが彼の神学上の立場にどのように影響しているか、あるいは影響していなかったかを明らかにする。

また、これらに加えて、本論文では「キリスト論」という問題が有する射程を最大限広くとったアプローチを行う。というのも、キリスト論研究の多くは「本性（ピュシス）」や「ヒュポスタシス」といった存在論上の用語の定義に基づく教理的言語の体系を明らかにすることに主眼がおかれてきた。しかし、キリストは「受肉したロゴス」、すなわち「人間となった神」である以上、キリスト論は、人間存在の探求でもある。また、パウロが教会を「キリストの体」と表現したことを踏まえると、キリスト論は教会論でもある。それゆえ、本論文ではネルセス・シュノルハリの教会論、人間論、宇宙論など、彼の世界観の総体を明らかにした上で、それがどのようにして彼のキリスト論として結実しているかを分析する。

上述のような本研究のアプローチは、「正統」あるいは「エキュメニズム」という概念を前提とする先行研究に対する批判ではあるものの、現代における正統やエキュメニズムのあり方においてネルセス・シュノルハリの神学が価値をもたないということを示すためのものではない。むしろ、ネルセス・シュノルハリが本当に現代にも通用しうる「正統」概念やあるいは「エキュメニズム」の萌芽ともとれる精神の持ち主であったとして、そのような思想あるいはメンタリティが、彼が生きた時代の歴史的文脈の中で、また彼自身の内面における思想的発展の中で、どのように醸成されてきたのかを明らかにするのが本研究の目指すところである。

論文の構成

本論文は、ネルセスの生涯と著作を年代順に追っていくが、研究のテーマである教会合同の議論の開始の時期（1165年）を基準に、第1部と第2部に分けられる。第1部において教会合同に携わる前のネルセス・シュノルハリの生涯とその思想的発展を、当時アルメニア社会が置かれていた「分裂」状態とその克服という観点から論じ、第2部において教会合同をめぐる議論の進展とその中で展開されたネルセス・シュノルハリのキリスト論について論じる。

第1部

第1部第1章では、ネルセス・シュノルハリの出自と歴史意識について、『叙事詩』(1121年)と題された彼の長編詩に基づいて分析した⁶。9世紀後半にコーカサス南部からアナトリア半島東部のヴァン湖周辺に成立したアルメニア人君主の連合王国であるバグラトゥニ朝アルメニア王国は、1045年にビザンツ皇帝に王権と首都アニを奪われたことで崩壊した。また、その直後にセルジューク朝の軍勢がアナトリア全域を席卷したことによって、多くのアルメニア人有力者が先祖伝来の土地を捨て、ビザンツ領内で皇帝の庇護と新たな封土を得るに至った。この一連の出来事を、同時代のアルメニア人歴史家は、5世紀のアルシャクニ朝アルメニア王国の滅亡とそれに伴うアルメニア人の離散と重ね合わせ、「二度目の離散」「二度目の故郷喪失」として叙述した。こうした状況下で、アナトリア半島南部のキリキア地方に勢力を築いたルベニヤン家とヘトゥミヤン家は、後のキリキア・アルメニア王国の基盤となる公国を形成した。ネルセス・シュノルハリを輩出したアルメニアの名家パフラヴニ家も、11世紀後半にビザンツ領内のユーフラテス沿岸の封土へと移住した。軍事的・経済的な面では上述のルベニヤン家・ヘトゥミヤン家に劣るものの、パフラヴニ家は4世紀初頭にアルメニアをキリスト教化した聖人であるグリゴル・ルサウオリチの末裔を自称し、11世紀半ばから13世紀初頭までおよそ140年間にわたってカトリコス座を独占してきた。上述の『叙事詩』は、ネルセス・シュノルハリの実兄グリゴルがグリゴル3世カトリコスとして即位した際に書かれたものである。その中でネルセスは、アルメニア民族の歴史を叙述しながら、地理的・政治的に分断されたアルメニア人社会を「グリゴル・ルサウオリチの後継者」が一つにまとめ上げるという未来のビジョンを描き出した。ここでは、「二度目の離散」によって分断された当時のアルメニア人を一つの共同体・国家へと再統合するというネルセス自身の理想が現れている。

続く第2章では、アルメニア教会を含む全世界の教会が分裂状態にあるという現実とネルセスがどのように向き合ったかを、彼の代表作の一つである『エデッサの哀歌』(1145-6年)を中心に明らかにした⁷。1130年代後半から1140年代にかけて、ヨハネス2世コムネノスは二度にわたるキリキア遠征を行った。その際、キリキアのアルメニア教会や修道院はビザンツ軍により大きな損害を被った。それによってビザンツへの不信感を強めたアルメニア教会は、第一回十字軍以後にわかに新勢力として彼らの前に現れたラテン・カトリック教会との協調の可能性を模索しはじめた。1144-5年のザンギーに

⁶ Ներսէս Շնորհալի, *Վիպասանութիւն, Քննական բնագ., ծանոթագր. և առաջար. հեղ.*՝ Մ.Ս. Մկրտչյան (Երևան : ՀՍՄՀ ԳԱԱ հրատ., 1981).

⁷ Ներսէս Շնորհալի, *Երգեր : Եղեւիայի ողբը*: Առաջար. և թարգմ.՝ Լ. Միրիջանյան (Երևան : Սովետական գրող, 1982)

よるエデッサ陥落を題材とした韻文『エデッサの哀歌』において、ネルセスは「西方」すなわちローマからのキリスト教徒の軍勢がエデッサを奪回する展望を語るとともに、最初のキリスト教君主として知られるアブガル王の伝説をもつ都市エデッサを舞台装置として、かつての「全地教会」の記憶を呼び覚ますことで、分裂状態にある教会の「一致」のビジョンを示そうとした。しかし、そのような楽観的な期待とは裏腹に、第二回十字軍が失敗に終わったばかりか、1150年のルーム・セルジューク朝の西進によって故郷を追われたネルセスは、ユーフラテス川西岸のフロムクラ（現トルコ共和国ルムカレ）へ避難し、その結果キリキアのアルメニア人コミュニティから地理的に孤立することになった。これまでネルセスが描き出してきた「分裂から一致へ」の道は、「歴史」の必然としてもたらされるマクロなレベルでの救済の希望によって裏打ちされていたが、アルメニア人社会から切り離され、同胞たるキリスト教徒からの援助も期待できないという現実を目の当たりにし、もはやそのような希望を抱くことは難しくなった。

第3章では、ネルセスの文学的関心が、人類あるいは教会・民族の歩みとしての「歴史」から、個人の「信仰」へと移っていったことを、フロムクラ時代に書かれた彼の韻文や書簡の分析を通じて明らかにした。1152年に書かれた韻文『子イエス』⁸と、1160年代に書かれたと推定される韻文『信とともに告白します』⁹は、いずれも人間の内面、とりわけ罪とそこからの救済の渴望を主題としている。これらの作品においてネルセスは、人間一人一人が自身の罪深さを自覚した上で神と真摯に向き合うことを唯一の救いの道として描き出している。そして1166年にアルメニア教会の全信徒に向けて書かれた『回勅』¹⁰において、「正統な信仰」とは、各人が「神が常に近くに在る」ことを信じ、一人一人が神の前で主体的に善をなすことであると主張した。このようにネルセス・シュノルハリは、自身が直面するさまざまな困難からの「救済」を、もはや歴史の必然として外部からもたらされるものとしてではなく、人間一人一人が主体となって神に救いを求め善を為すことでのみ実現されうるものとして考えるようになった。そして、この「人間一人一人が主体的に行動すること」の重要性は、教会の一致をめぐる彼の言説の中でも訴えられるようになる。

⁸ Ներսէս Շնորհալի, «Հիսուս որդի»: Վիպասանական ողբերգություն, գրաբարաց թարգմ. Վ. Ղազարյան (Երևան: Ապոլոն, 1991).

⁹ Ներսէս Շնորհալի, Հաւատով Խոստովանիմ (Երևան: ԵՊՀ Հրատ., 2013).

10

第2部

第2部では、1165年以降のビザンツ・アルメニア間の教会合同をめぐる議論の進展と、そこで展開されたネルセスのキリスト論について論じる。まず、第2部第1章では、教会合同交渉時にネルセス・シュノルハリが置かれていた状況を詳しく検討した。まず、ネルセス・シュノルハリが当初抱いていたラテン・カトリックとの同盟への希望は第二回十字軍の失敗により潰えたことは第1部でも述べた通りである。また、ネルセスは1166年に自身の兄カトリコス・グリゴル3世の後を継いでカトリコスの座についたが、このときヌールディーンとの戦いで劣勢に立たされていたラテン勢力に対して、ビザンツ帝国が優位の立場にあった。それゆえ、ネルセス・シュノルハリはビザンツ帝国の庇護を求めざるを得ない状況であったが、ヨハネス2世コムネノスのキリキア遠征時にアルメニア教会が大きな被害を蒙ったことは、彼の記憶に未だ生々しく残っていた。そうした状況下で、1165年にモプスエティアでビザンツ帝国のキリキア総督アレクシオス・アクスフとネルセス・シュノルハリとの会見が行われたことが発端となり、ビザンツ・アルメニア間の教会合同案が提起された。教会合同をめぐる交渉の中でネルセスが最も重要視したのは、ビザンツによるアルメニア人に対する武力行使を避けることであった。続く第2章では、そうしたネルセスの「外交的配慮」が彼のキリスト論に影響しているか否かという点を検討した。ここではまず、議論の前提としてカルケドンのキリスト論と非カルケドン派のキリスト論の相違について大まかに述べた上で、ネルセス・シュノルハリの1165年以前と以後のキリスト論を比較した。その結果、上述の「外交的配慮」が彼のキリスト論に根本的な変質をもたらしたわけではなく、むしろネルセスはアルメニア教会の伝統的キリスト論に忠実であったことが明らかとなった。カルケドンのキリスト論では、「本性（ピュシス）」と「ヒュポスタシス」は明確に区別され、「ヒュポスタシス」として現存するキリストという個的存在の中に、神的本性と人間本性とが存在する。そしてこの「ヒュポスタシス」の中で神性と結びついていることで、人間本性は「神化」される。一方、ネルセスが立脚するアルメニア教会の伝統的キリスト論は、「本質」「本性」「ヒュポスタシス」といった存在論上の用語にあえて明確な区別や定義を与えず、「一なる本質・一なる本性・一なるヒュポスタシス」といったように、それらを全て「キリストにおける神性と人性の神秘的合一」を指し示す語として用いる。ここでは、キリストにおいて現実として成就した神性と人性の一致が、人間の救済の希望として呈示されている。ネルセス・シュノルハリは、いずれのキリスト論も「語りえざる神秘」を言語化する上で有効であるということを主張した。

第3章では、ネルセスが1161年に表した宇宙や自然現象に関する韻文『天とその装

飾について』¹¹というテキストに基づいて、彼のキリスト論が、人間論、宇宙論そして教会論をも包括するような世界観の総体ともいうべきものであることを論じた。ネルセス・シュノルハリの世界観では、人間は「魂と肉体」という全く性質の異なる「二からなる一」であり、そして物質世界もまた互いに相反する性質をもつ元素が結びついて成り立っている。そうした種々の「二（あるいは多）からなる一」は、神性と人性という決して交わることないはずのものを結合させた究極の「二からなる一」であるキリストの存在の内に包摂されている。そして、分かたれた教会が一となることもまた、キリストが「相反する二を一とした」という動かざる真実によって保障されている。しかし、キリストが人間への限りない愛によって神から人間となったように、教会が一となるには、互いに対する愛が不可欠であるとネルセスは主張する。

¹¹ Ներսէս Շնորհալի, *Յաղագս երկնի և գաղղուց նորա; Հանելուկներ; Ողբ Եղեսիոյ*, Գ. Ա. Հակոբյան, և Լ. Վ. Միրիջանյան (Երևան: Հայաստան, 1961).

結論

以上のことから導かれる結論として、第一に、ネルセス・シュノルハリのキリスト論は、彼の「分かれたものを一つにする」という問題意識に裏打ちされているということが指摘できる。初期の作品ではその「一」が人間の意志の及ばない「歴史」の必然として実現されることを望んだネルセスだが、困難な現実直面の中で、一人一人の神に対する信仰と善き行いこそが一致を成し遂げる唯一の道であると主張するに至った。その一方で、ビザンツとの教会合同をめぐる議論の中で見せたネルセスの宥和的姿勢は、「教会はひとつであるべき」という理想論に動機付けられたものというよりは、現実に対応した対応であった。また、ネルセスの信仰告白に見られるキリスト論は、厳密な用語の定義に基づいて「一」の中に「二」が存在することを宣言するカルケドンの体系よりも、「二」（あるいは多）の「一」への志向性を強調するアルメニア教会の伝統的なキリスト論に近いことも明らかにされた。

付録

ネルセス・シュノルハリの著作一覧

本稿で言及した作品には脚注参照での表記を下線で示した。

韻 文

Vipasanut'iw 『叙事詩』 Վիպասանութիւն (1121 年)

Ներսէս Շնորհալի, *Վիպասանութիւն*, Քննական բնագ., ծանոթագր. և առաջաբ. հեղ.՝ Մ.Ս. Մկրտչյան (Երևան : ՀՍՍՀ ԳԱԱ հրատ., 1981).

Olb Edesioy 『エデッサの哀歌』 Ողբ Եդեսիոյ (1145-6 年)

Ներսէս Շնորհալի, *Երգեր : Եդեսիայի ողբը*: Առաջաբ. և թարգմ.՝ Լ. Միրիջանյան (Երևան : Սովետական գրող, 1982) (原文テキストと現代アルメニア語訳)
(英語訳) Van Lint, Theo M. Lament on Edessa by Nerses Snorhali. Krijnie Ciggaar & Herman Teule (ed.), *East and West in the Crusader States II* (Leuven: Peeters, 1999), 29-48.

Ban hawatoy 『信のことば』 Բան հաւատոյ (1151 年)

«Բան հաւատոյ», *Տն. Ներսէսի Շնորհալոյ բանք չափաւ* (Վենետիկ: Սուրբ Ղազար տպ., 1830), pp. 168-227.

Yisus 『子イエス』 Յիսուս Որդի (1152 年)

Ներսէս Շնորհալի, «*Հիսուս որդի*»: Վիպասանական ողբերգություն, գրաբարաց թարգմ. Վ. Ղազարյան (Երևան: Ապոլոն, 1991). (原文テキストと現代アルメニア語訳)
(英語訳) Misha Kudian (trans.) *Jesus, the Son* (London: Mashtots Press, 1986).
(仏語訳) Isaac Kechichian (trans.) *Jesús, Fils unique du Père* (Paris: Editions du Cerf, 1973).

Yalags erkini Յաղագս երկնի եւ զարդոց նորա 『天とその装飾について』 (1162 年)

Ներսէս Շնորհալի, *Յաղագս երկնի և զարդոց նորա: Հանելուկներ: Ողբ Եդեսիոյ*, Գ. Ա. Հակոբյան, և Լ. Վ. Միրիջանյան (Երևան: Հայաստան, 1961).

Hawatov xostovanim 『信とともに告白します』

Հաւատով խոստովանիմ (1160 年代?)

Preces Sancti Nersesis Clajensis Armeniorum Patriarchae (Triginta sex linguis editae) (Venetiis: Typs PP. Mechitaristarum, 1882) : 2013 年のリプリント Ներսէս Շնորհալի, *Հաւատով խոստովանիմ* (Երևան: ԵՊՀ Հրատ., 2013) (アルメニア語その他 35 か国語の翻訳)

『詩歌集』 Տաղեր եւ շարականներ

Ներսէս Շնորհալի: Տաղեր եւ զանձեր, աշխատասիրութեամբ Ա. Քյոշկերյան (Երևան: ՀՍՍՀ ԳԱ հրատ., 1987)

書 簡

T'utt'k' 『ネルセス・シュノルハリ書簡集』

Ընդհանրական թուղթքս Ներսիսի Շնորհալույ (Երուսաղէմ, 1871)

Ստամբուլցյանը, Սեդա. *Նամականի ԺԲ դար : Հայ-բյուզանդական եկեղեցական բանակցություններ* (Էջմիածին: Մայր Աթոռ Ս. Էջմիածին, 2011) (現代東アルメニア語訳)

Augé, Isabelle. *Églises en dialogue : Arméniens et Byzantins dans la seconde moitié du XIIe siècle* (Louvain: Peeters, 2011), 245-256. (仏語訳)

Sancti Nersesis Clajensis, Armeniorum catholici Opera, nunc primum ex armenio in latinum conversa, Joseph Cappelletti (Venetiis: Typs PP. Mechitaristarum, 1833) (ラテン語訳)

聖 書 注 解

『マタイ福音書註解』 Մեկնութիւն սուրբ Աւետարանին որ ըստ Մատթէոսի Ներսէս Շնորհալի, Յովհաննէս Ծործորեցի, *Մեկնութիւն սուրբ Աւետարանին որ ըստ Մատթէոսի* [մինչև Ստթ. Ե 17 Շնորհալու մեկնութիւնն է, յետոյ՝ Ծործորեցու] (Կ. Պոլիս: Արքահամի ամիրայ Ակնեցոյ տպարան, 1825).

文獻目録

MH: Մատենագիրք Հայոց Mate'nagirk'Hayoc'

PG: Patrologia Graeca

一次文献

<アルメニア語>

Agat'angelos (1909)

Ագաթանգեղայ պատմութիւն հայոց, Աշխատութեամբ Գ. Տէր-Մկրտչեան եւ Ստ. Կանայեանց, Ծախիւք տեառն Սուրբասայ արքեպիսկոպոսի Պարզեանց (Թիֆլիս : տպ. Մնացական Մարտիրոսյանցի, 1909).

(英語訳) Agathangelos, *History of the Armenians*, Robert W. Thomson (tr.) (New York: State University of New York Press, 1974).

Anania Sanahneç'i

Անանիայի վարդապետի հայոց բան հակաճառութեան ընդդէմ երկաբանկաց, գոր գրեաց հրամանաւ տեառն Պետրոսի հայոց վերադիտող, *Գանձասար* 3 (1993) 174-215.

Aristakēs Lastivertç'i (1901)

Պատմութիւն Արիստակէայ վարդապետի Լաստիվերտցուոյ, թարգմ. Մինաս քին. Տէր-Պետրոսեանց, Բ. տպ. (Վենետիկ: Սուրբ Ղազար տպ., 1901).

Efišē

Եղիշէ, *Վասն Վարդանայ և հայոց պատերազմին*, ի լոյս ածեալ Երվանդ Տէր-Մինասեան (Երևան: ՀՍՍՌ ԳԱ հրատ., 1957).

Girk' t't'oc' (1901)

Գիրք թղթոց. Մատենագրութիւն նախնեաց (Թիֆլիս, 1901).

Grigor Magistros

Գրիգորի Մագիստրոսի թուղթք, MH 16 (Երան: Մատենադարան, 2012).

Grigor Narekac'i

Գրիգոր Նարեկացոյ քարոզ, ասացեալ ի փոխումն ամենարինեալ սուրբ Աստուածածնին: MH 12 (Երան: Մատենադարան, 2010).

Kirakos Ganjakec'i (1961)

Կիրակոս Գանձակեցի, *Պատմութիւն Հայոց*, աշխատասիրութեամբ՝ Կ. Մելիք-Օհանջանյանի (Երևան: ԱՀՀԱ, 1961).

Lazar P'arpec'i (1904)

Ղազարայ Փարպեցոյ Պատմութիւն Հայոց եւ Թուղթ առ Վահան Մամիկոնեան,

աշխատութեամբ Գ. Տէր-Մկրտչեան և ՍՏ. Մալխասեան, (Տփղիս: Արագատիպ Անատական Սարտիրոսեանցի, 1904).

Matt'ēos Urihayec'i

Մատթէոս Ուռհայեցի, *Ժամանակագրութիւն*, Բ. տպագրութիւն (Վաղարշապատ: տպ. Մայր Աթոռ Սուրբ Էջմիածին, 1898).

Movsēs Xorenac'i

Մովսիսի Խորենացոյ Պատմութիւն հայոց, աշխատասիրութեամբ Մ. Աբեղեանի և Ս. Յարութիւնեանի (Տփղիս, 1913).

Mxit'ar Ayriuanec'i (1898)

Մխիթարայ Այրիվանցոյ Պատմութիւն ժամանակագրական (Ս. Պետերբուրգ: տպ. կայսերական ճեմարանի գիտութեանց, 1867).

Yovhannēs Ojñec'i (1953)

Յովհաննու Ռմաստասիրի Աւանցոյ մատենագրութիւնք (Վենետիկ: Սուրբ Ղազար տպ., 1953).

Smbat Sparapet

Սմբատայ Սպարապետի տարեգիրք (Վենետիկ: Ս. Ղազար, ՀԲԸՄ Խ. վրդ. Լազարեանի հիմնադրամի հրատ, 1956).

Stepanos Siwnec'i

Ստեփանոսի Մինցոյ գիրք ընդէմ երկոբնաց, MH 6 (Երան: Մատենադարան, 2010).

Stepanos Taronec'i

Ստեփաննոս վարդապետի Տարօնցոյ Տիեզերական պատմութիւն, MH15 (Երան: Մատենադարան, 2014) 639-829.

<その他の言語>

Anna Comnena

Anna Comnena, *Alexiade : règne de l'empereur Alexis I Comnène, 1081-1118* ; texte établi et traduit par Bernard Leib (Paris : Les Belles lettres, 1967), t. 2.

Arsen Sapareli

არსენი საფარელი, განყოფილების ქართლისა და სომხეთისა, Zaza Aleksidze et Jean-Pierre Mahé (texté et traduction annotée), Arsen Sapareli: Sur la separation des Géorgiens et des Arméniens, *Revue des Études Arméniennes* 32 (2010).

Gregorii VII registrum

Caspar, Erich, *Das Register Gregors VII, Epistolae Selectae in usum scholarum ex Monumentis Germaniae Historicis*, vol. ii (Berlin : Weidmannsche Buchh, 1923), Bk vii, ep. 28, 509-10.

Kartlis Ts'khovreba (1959)

ქართლის ცხოვრება, სიმონ ყაუხჩიშვილის გამოცემა, ტომი 2 (თბილისი; განათლება, 1959).

Kinnamos

Ioannis Cinnami Epitome rerum ab Ioanne et Alexio Comnenis gestarum, A. Meineke (ed.), *Corpus Scriptorum Historiae Byzantinae* (Bonn: Impensis e. d. Weberi, 1836).

Michel le Syrien (Chabot, 1905)

(仏語訳) *Chronique de Michel le Syrien*, traduction française par J.-B. Chabot, tome 3 (Paris, 1905).

Nemesius

Morani, Moreno. *Nemesii Emeseni de natura hominis* (Leipzig : B.G. Teubner, 1987) .

(古典アルメニア語訳) *Նեմեսիոսի փիլիսոփայի էսեսացույ յաղագս բնութեան մարդոյ* (Վենետիկ : Մխիթարեան տպարան, 1889).

(英語訳) Nemesius, *On the Nature of Man*, Philip van der Eijk & R.W. Sharples (tr.), *Translated Texts for Historians* (Liverpool: Liverpool University Press, 2008).

Niketas

Первое обличительное слов против армян, публикация греческого текста, вступительная статья и примечания игумена Дионисия (Шленова), публикация грузинского текста М. А. Рапава, *Богословский Вестник* № 7 (2008), 39-125.

Второе и третье обличительные слова против армян (там же), *Богословский Вестник* № 10 (2010), 32-124.

Ottonis episcopi Frisingensis Chronica

Hofmeister, Adolf (ed.), *Scriptores rerum Germanicarum in usum scholarum separatim editi 45: Ottonis episcopi Frisingensis Chronica sive Historia de duabus civitatibus* (Hannover, Impensis bibliopolii Hahniani, 1912)

Theorianos

Θεωριανοῦ ὀρθοδόξου διάλλεξις πρὸς τὸν καθολικὸν τῶν Ἀρμενίων, J. P. Migne (ed.), *Patrologiae Cursus Completus, Series Graeca* vol. 133 (1864).

Willemi Tyrensis Archiepiscopi Chronicon

Huygens, R. B. C. (ed.), *Willemi Tyrensis Archiepiscopi Chronicon*, vol. 2 (Turnholt: Brepols, 1986)

(英語訳) William of Tyre, *A History of Deeds Done Beyond the Sea*, trans. Emily A. Babcock and A.C. Krey (New York: Columbia University Press, 1943).

二次文献

- Adontz, Nicholas. *Armenia in the Period of Justinian*, translated with partial revisions, a bibliographical note and appendices by Nina Garsoïan (Lisbon: Calouste Gulbenkian Foundation, 1970).
- Aleksidze, Zaza. The Visions of Grigor and Sahak Part'ew: Old Georgian Versions and Their Reflection in Georgian Sources. Kevork Bardakjian & Sergio La Porta (ed.) *The Armenian Apocalyptic Tradition: A Comparative Perspective* (Brill: Leiden, Boston, 2014).
- Ashjian, Mesrob. *St. Nerses of Lambron: Champion of the Church Universal* (New York: The Armenian Prelacy, 1993).
- Augé, Isabelle. Convaincre ou contraindre : la politique religieuse des Comnènes à l'égard des Arméniens et des Syriaques Jacobites, *Revue des études byzantines* 60 (2002), 133-150.
- . L'« école » de traduction des catholicos de Cilicie de l'avènement de Grigor II Vekayasêr à la mort de Grigor IV Tegha (1065-1193). *Bizantinistica Rivista di Studi Bizantini e Slavi* 8 (2006): 233-244.
- . *Byzantins, Arméniens et Francs au temps de la croisade. Politique religieuse et reconquête en Orient sous la dynastie des Comnènes 1081-1185* (Paris: Paul Geuthner, 2007).
- . Les relations arméno-grecques dans la seconde moitié du XIIe siècle : aspects diplomatiques. *Bizantinistica Rivista di Studi Bizantini e Slavi* 10 (2008): 139-155.
- . Les Grecs et leurs rapports avec les Arméniens dans les sources arméniennes du XIIe siècle. Essai d'historiographie. *Le Muséon* 121, 3-4, (2008): 337-352.
- . *Églises en dialogue : Arméniens et Byzantins dans la seconde moitié du XIIe siècle* (Louvain: Peeters), 2011.
- Bozoyan, Azat A. Armenian Political Revival in Cilicia. Hovannisian, Richard G. et Simon Payaslian (ed.) *Armenian Cilicia* (Costa Mesa: Mazda Publishers, 2008), 131-152.
- Chaumont, Marie-Louise. Une visite du roi d'Arménie Tiridate III à l'empereur Constantin à Rome? Karen Yowzbašyan (ed.) *L'Arménie et Byzance, Histoire et culture* (Paris: Publications de la Sorbonne, 1996), 55-66.
- Cheyne, Jean-Claude. Les Arméniens de l'Empire en Orient de Constantin X à Alexis Comnène (1059-1081). Karen Yowzbašyan (ed.) *L'Arménie et Byzance: histoire et culture* (Paris: Centre de Recherches d'Histoire et de Civilisation Byzantines, Université de Paris, 1996), 65-78.
- Darrouzès, Jean. Trois documents de la controverse gréco-arménienne. *Revue des études byzantines* 48 (1990), 89-153.
- Der-Nersessian, Sirarpie. The Kingdom of Cilician Armenia. K. M. Setton (gen. ed.) *A History of the Crusades* vol. II, (Philadelphia: Pennsylvania University Press, 1962) Chapter XVIII, pp. 630-659.

- f. *Arméniens et Byzantins à l'époque de Photius: deux débats théologiques après le Triomphe de l'orthodoxie* (Louvain: Peeters, 2004).
- . *Christ in Armenian Tradition: Doctrine, Apocrypha, Art (Sixth–Tenth Centuries)* (Leuven: Peeters, 2016).
- El-Azhari, Taef. *Zengi and the Muslim Response to the Crusades: The politics of Jihad* (London; New York : Routledge, 2016). Kindle version (published by Amazon).
- Florovsky, Georges. The Message of Chalcedon. *The Ecumenical Review*, Volume 4, Issue 4 (1952), 394-397.
- Frazer, Charles, A. The Christian Church in Cilician Armenia: Its Relations with Rome and Constantinople to 1198. *Church History* 45 [2] (1976), 166-184.
- Frend, William H. C. *The Rise of the Monophysite Movement* (Cambridge: University Press, 1972).
- Garsoïan, Nina G. Prolegomena to a Study of the Iranian Aspects in Arsacid Armenia. *Handes Amsorya: Zeitschrift für armenische Philologie* XC (1976), 177-234; *Armenia between Byzantium and the Sasanians* (London: Variorum Reprints 1985), X 10-11.
- . Quelques précisions préliminaires sur le schisme entre les églises byzantine et arménienne au sujet du concile de Chalcédoine II. La date et les circonstances de la rupture. Karen Yowzbašyan (ed.) *L'Arménie et Byzance* (Paris: Publications de la Sorbonne, 1996)
- . The Byzantine annexation of the Armenian kingdoms, Hovhannisian. Richard G. (ed.) *The Armenian People from Ancient to Modern Times, Volume 1, The Dynastic Periods: From Antiquity to the Fourteenth Century* (New York: St. Martin's Press, 1997) 187–198..
- Gelzer, Heinrich, Hilgenfeld, Heinrich & Cuntz, Otto. *Patrum nicaenorum nomina Latine, Graece, Coptice, Syriace, Arabice, Armeniace* (Leipzig: Aedibus B. G. Teubneri, 1898).
- Ghazarian, Jacob G. *The Armenian Kingdom in Cilicia During the Crusades* (Richmond: Curzon Press, 2000).
- Halfter, Peter. *Das Papsttum und die Armenier im frühen und hohen Mittelalter: Von den ersten Kontakten bis zur Fixierung der Kirchenunion im Jahre 1198* (Köln, Weimar, Wien: Böhlau-Verlag GmbH, 1996).
- . Papacy, Catholicosate and the Kingdom of Cilician Armenia, Hovhannisian, Richard G. & Simon Payaslian (ed.) *Armenian Cilicia* (Costa Mesa: Mazda Publishers, 2008) 111-130.
- . L'Église arménienne entre la papauté et les Byzantins aux XII et XIII siècles, Isabelle Augé et Gégard Dédéyan (ed.) *L'Église arménienne entre Grecs et Latins. Fin XIe - milieu XVe siècle* (Paris: Geuthner), 63-78.
- Hamilton, Bernard. The Armenian Church and the Papacy at the Time of the Crusades. *Eastern*

- Churches Review* 10 (1978), 61-87.
- . Aimery of Limoges, Latin Patriarch of Antioch (c. 1142-c.1196) and the Unity of the Churches. Krijnie Ciggaar and Herman Teule (ed.) *East and West in the Crusader States: Context-Contacts-Confrontations*, vol. 2, (Leuven: Peeters, 1999), 1-12.
- Krikorian, Mesrob K. *Christology of the Oriental Orthodox Churches: Christology in the Tradition of the Armenian Apostolic Church* (Frankfurt am Main: Peter Lang, 2010).
- MacEvitt, Christopher. The Chronicle of Matthew of Edessa: Apocalypse, the First Crusade, and the Armenian Diaspora. *Dumbarton Oaks Papers* Vol. 61 (2007), 157-181.
- . *The Crusades and the Christian World of the East: Rough Tolerance* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2008).
- Magdalino, Paul. *The Empire of Manuel I Komnenos, 1143-1180* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 2002).
- Mahé, Jean-Pierre. L'Églises Arménienne de 611 à 1066. Jean-Marie Mayeur et al. (éd.). *Histoire du christianisme, tome 4 : Evêques, moines et empereurs, 612-1054* (Paris: Desclée, 1993), 457-547.
- Menze, Volker L. *Justinian and the Making of the Syrian Orthodox Church* (New York: Oxford Univ. Press, 2008).
- Meyendorff, John. *Imperial Unity and Christian Divisions: The Church 450-680 A.D* (New York: St. Vladimir's Seminary Press, 1989).
- Michelson, David A. *The practical Christology of Philoxenos of Mabbug* (Oxford: Oxford University Press, 2014).
- Palmer, Andrew. The History of the Syrian Orthodox in Jerusalem, Part One. *Oriens Christianus* 75 (1991) 16-43; Part Two, *Oriens Christianus* 76 (1992) 74-94.
- Philips, Jonathan. Armenia, Edessa and the Second Crusade. Norman Housley (ed.) *Knighthoods of Christ : essays on the history of the Crusades and the Knights Templar, presented to Malcolm Barber* (Aldershot, Hampshire; Burlington, VT : Ashgate, 2007).
- Pogossian, Zaroui. *The Letter of Love and Concord: A Revised Diplomatic Edition with Historical and Textual Comments and English Translation* (Leiden; Boston: Brill, 2010).
- Rapp, Stephen H., Jr. "Georgian Christianity". Ken Parry (ed.), *The Blackwell Companion to Eastern Christianity* (West Sussex; Wiley-Blackwell, 2010) 138-55.
- Rüdt-Collenberg, William Henry. *The Rupenides, Hetumides, and Lusignans. On the structure of the Armeno-Cilician dynasties* (Lissabon: Calouste Gulbenkian Foundation, 1963).
- Runciman, Steve. *A History of the Crusades: Volume II The Kingdom of Jerusalem and the Frankish East, 1100-1187* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1968).
- Terian, Abraham. "The Early Creeds of the Armenian Church." *Warszawskie Studia*

- Teologiczne* (XXIV/2/2011): 299-312.
- Thomson, Robert W. Mission, Conversion and Christianization: The Armenian Example. *Harvard Ukrainian Studies* 12/13 (1988/89), 28-45; *Studies in Armenian Literature and Christianity* (Variorum, 1994).
- The Formation of the Armenian Literary Tradition. Nina Garsoïan, Thomas Mathews & Robert W. Thomson (ed.) *East of Byzantium: Syria and Armenia in the Formative Period* (Washington D. C.: Dumbarton Oaks, 1980), 135-150; *Studies in Armenian Literature and Christianity* (Variorum, 1994).
- *Saint Basil of Caesarea and Armenian Cosmology: A Study of the Armenian Version of Saint Basil's Hexaemeron and its Influence on Medieval Armenian Views about the Cosmos* (Louvain: Peeters, 2012).
- Van Lint, Theo M. Lament on Edessa by Nerses Snorhali. Krijnie Ciggaar & Herman Teule (ed.), *East and West in the Crusader States II* (Leuven: Peeters, 1999), 29-48.
- Winkler, Gabrielle. An Obscure Chapter in Armenian Church History (428-439). *Revue des Études Arméniennes* 19 (1985), 85-179.
- Zekiyan, Boghos Levon. St Nersēs Šnorhali en dialogue avec les Grecs: Un prophète de l'oecuménisme au XIIe siècle. Dickran Kouymjian (ed.) *Armenian Studies in Memoriam Haig Berberian* (Lisbon: Calouste Gulbenkian Foundation & Livraria Bertrand, 1986), 861-883.
- The Armenian Community of Philippopolis and the Bishop Ioannes Atmanos Imperial Legate to Cilicia. György Kara (ed.) *Between the Danube and the Caucasus a coll. of papers concerning oriental sources on the history of the peoples of Central and South-Eastern Europe* (Budapest: Akadémiai Kiadó, 1987), 363-373.
- Quelques traits de la spiritualité de l'Église arménienne dans l'horizon de la démarche oecuménique de l'époque. Augé, Isabelle et Gérard Dédéyan (ed.) *L'Eglise arménienne entre Grecs et Latins : Fin XIe - milieu XVe siècle* (Paris: Geuthner, 2009), 13-34.
- Казинян, А. А. Мир и человек в творчестве Нарекаци. отв. редактор Н. С. Надьярных. *Григор Нарекаци и духовная культура Средневековья* (Москва: Ин-т мировой литературы им. А. М. Горького РАН, 2010), 23-37.
- Рапава, Майя А. Полемические сочинения против армянского монофизитства в древнегрузинской письменности. *Вестник ПСТГУ* вып. 3[23] (2008), 13-29.
- Степаненко, Валерий, П. Государство Филарета Варажнуни (1071-1084/86 гг.). *Античная древность и средние века*, Вып. 12 (1975), 86-103.
- Флоровский, Георгий. *Византийские отцы V-VIII вв.* (Париж: Православный Богословский Институт, 1933).
- Ալիշահն , Ղազար. Շնորհալի և Կաթողոսի իր (Վենետիկ: տպ. Սուրբ Ղազար, 1873).

Բոզոյան, Ազատ, *Հայ-Բյուզանդական Եկեղեցական Բնակացությունների վավերագրերը* (1165-1178 թթ.) (Երևան: «Գիտություն» հրատ., 1995).

— Հայ-բյուզանդական և եկեղեցաքաղաքական բանակցությունների մասնակիցներն ու վավերագրերի թարգմանիչները (XII դարի 60-70-ական թվականներ). Պատմա-բանասիրական հանդես, № 4 (1990), 81-93.

Հակոբյան, Գրիգոր. *Ներսես Շնորհալի* (Երևան: Հայկական Սառ Գիտությունների Ակադեմիա Հրատ., 1964)

Հակոբյան, Թադևոս, *Պատմական Հայաստանի քաղաքները* («Հայաստան» հրատարակչություն: Երևան, 1987).

Խաչատրյան, Պողոս Մ., *Հայ միջնադարյան պատմական ողբեր* (Երևան: ԱՍՀՀ, 1969).

Պալճեան, Ա., *Պատմութիւն Կաթողիկէ Վարդապետութեան ի Հայս եւ Միութեան նոցա ընդ Հռոմէական Եկեղեցոյ ի Փլորենտեան Սինհոդոսի* (Վիեննա: Մխիթարիստ տպ., 1878).

Վարդանյան, Վրեժ, Աղթամարի Կաթողիկոսության Հիմնադրման շուրջ, *Պատմա-Բանասիրական Հանդես* 2[70] (2010), 70-80..

坂口ふみ『＜個＞の誕生：キリスト教教理をつくった人びと』（岩波書店、1996年）。

上智大学中世思想研究所（編訳・監修）『中世思想原典集成2：盛期ギリシア教父』（平凡社、1992年）。

甚野尚志「ローマはキリスト教世界の「頭」か？—東西教会の首位権をめぐる論争—」、甚野尚志・益田朋幸（編）『中近世ヨーロッパの宗教と政治—キリスト教世界の統一性と多元性—』（ミネルヴァ書房、2014年）43-65頁。

根津由喜夫『ビザンツ 幻影の世界帝国』（講談社、1999年）

水垣渡・小高毅（編）『キリスト論論争史』（日本キリスト教団出版局、2003年）

メイエンドルフ、J.（著）・小高毅（訳）『東方キリスト教世界におけるキリスト』（教文館、1995年）。

メイエンドルフ、J.（著）；鈴木浩（訳）『ビザンティン神学：歴史的傾向と教理的な主題』（新教出版社、2009年）。

レファレンス・辞典

Encyclopædia Iranica (online edition, New York, 1996-), <http://www.iranicaonline.org/>

Bedrossian, Matthias. *New dictionary Armenian-English* (Venice: St. Lazarus Armenian Academy, 1875-79).

Martirosyan, Hrach, *Etymological Dictionary of the Armenian Inherited Lexicon*, Leiden Indo-European Etymological Dictionary Series 8 (Leiden, Boston: Brill, 2010)

Քրիստոնյա Հայաստան հանրագիտարան (Երևան: Հայկական Հանրագիտարան

հրատարակչություն ՊՈԱԿ, 2002)

Նոր բառգիրք հայկազեան լեզուի (Վենետիկ: Տպարան ի Սրբոյն Ղազարու, 1836).